



解放と翼賛のあいだ：
女性指導者たちの戦争翼賛をどう論じるか(一九九七
年度第一回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004986

解放と翼賛のあいだ

—女性指導者たちの戦争翼賛をどう論じるか

萩原弘子

戦時中に日本の女性たちがした戦争協力ないしは翼賛について、解明すべきこと、論ずべきことは多い。女も戦争を支えた、その歴史的諸相を明らかにしようという論者たちのなかで、鈴木裕子はいくつもの著作で、女性指導者の戦時中の言論を検討している人である。私はこれまで、鈴木が、女性を戦争のひたすらな被害者と位置づけることへの批判をもつ点で共感するものの、日本の女の加害者性を論じるその姿勢には疑問を抱いてきた。ここで彼女の高良とみ論を中心に検討し、その議論のしかたに含まれる問題点を明らかにしたい。

一、鈴木裕子による高良とみ論

鈴木裕子が女性指導者の戦時中の言動を検討した主な仕事としては、『フェミニズムと戦争—婦人運動家の戦争協力』（マルジュ社、一九八六年）、『女性史を拓く1—母と女』、『女性史を拓く2—翼賛と抵抗』（未来社、一九八九年）、『フェミニズムと朝鮮』（明石書店、一九九四年）がある。このうちで高良とみを論じているのは、『フェミニズムと戦争』と『女性史を拓く2』である。高良が亡くなったのは一九九三年だから、いずれもまだ存命中に出版されたものである。

一九二二年に二六歳でアメリカ留学から帰国、二七年に日本女子大学教授に就任した和田とみは、二九年の結婚で高良姓となり、三〇年代に入ると生活合理化、生活改善の唱導者として精力的に活動するようになった。日中戦争が全面化した三七年の翌年、国民精神総動員中央連盟の非常時国民生活様式改善委員会の委員に就任した頃の高良が、家庭婦人に向けた生活改善（『贅沢追放』）の提唱をいくつも行なったなかに、着衣合理化の主張がある。東京朝日新聞掲載の発言「元禄袖実行を望む」は、たもとの長い着物をやめて働きやすい元禄袖を、と呼びかけたものだが、その発言に関連して、鈴木が次のように言っている。

「生活合理化、生活改善への高良の素志をわたくしは疑うものではない。ただ、それに対する論調の微妙な変化に注意したのである。さきの元禄袖でいえば、ホンネは元禄袖の奨励にあつて、非常時云々は、いわばタテマエであつたろう。だが、高良は体制にコミットしていけばいくほど、いつしかホンネとタテマエの位置は転倒し、逆転していったのではないだろうか。

（中略）結局のところ、わが高良とみも、彼女の主観はどうであれ、客観的にはゼイタク狩りの尖兵の役割を負わされていったのではなからうか。⁽¹⁾」（強調萩原）

この箇所少し前で、鈴木は、高良の戦前・戦後の平和運動を積極的に評価して次のように言っている。「ところで筆者は、戦後日本の平和運動に果たした高良とみの役割を軽くみるものではない。また若いころから身につけた国際性を武器に、女性の立場から平和の問題にいち早く着目し、提言を行っていた彼女の努力も評価されるべきと考える。にもかかわらず、そうした彼女の平和への努力も認めたいうえで、わたくしは彼女の戦中の行動もきちんと検討されるべきと考えるのである。⁽²⁾」（強調萩原）

ここで鈴木が、高良の戦中の行動を、戦前・戦後のそれと対照させ、両者のあいだに「ただ」「にもかかわらず」といった逆接の接続詞を置いていることに注目したい。鈴木にとって、戦中に大政翼賛の指導

者となった高良と、戦前・戦後の平和運動家としての高良のあいだには断絶がある。戦前と戦後の高良は肯定されており、鈴木が問題とするのは戦中の高良である。こういう鈴木論じ方は、高良以外の女性指導者に関する議論でもおおかた同じである。問題は、連続しない戦前から戦中への、そして戦中から戦後への、いわば二度の転向ということになる。

高良を「わが高良とみ」と呼んで敬愛やまない鈴木にとって、戦後の高良が戦中の転向への反省を言明しないままであることが残念でならない。戦後、高良は自分のかつての翼賛をさておき、アメリカをよく知る親米派として、また平和主義者として、四一年の真珠湾攻撃への当時の腹立ちを語っている。また、自分は日本軍部の無謀を当初から見抜いていたといった発言もしている。一九八三年刊行の高良の自伝『非戦（アヒンサー）を生きる』のなかのそうした記述を、鈴木は次のように批判する。

「国民精神総動員から大政翼賛へと総動員運動が転化するなかで、一貫してわが高良とみは指導者として婦人大衆の上に立ち続けてきた。ならばこそわたくしたちは指導者としての戦争責任についての言葉を聞きたいと思う。なぜ、戦争体制に組みこまれ、それを支え続けてきたかについて、その内的契機と論理を、得心のいくよう説明してもらいたいのである。⁽³⁾」

鈴木の議論のしかたをまとめれば、次のようなことになる。

- (a) 高良がした戦前と戦後の平和運動の努力は評価する。しかし、戦時中の言動は批判すべきものである。
- (b) 元禄袖がホンネ、非常時だからタテマエ、それが体制との関わりが深まるにつれて転倒・逆転した。
- (c) 戦時中の高良の翼賛の言辞を知った以上、戦後にした戦争批判の発言は納得いかない。反省してほしい。

つまり、戦前・戦後の非戦・平和と、戦時中の翼賛とのあいだに、懸隔、断絶があるというのが鈴木

見方である。ホンネあるいは素志のままに活動を展開できた戦前・戦後と、そのあいだにはさまれた、タテマエの表明に終始した戦時中（ないしは、タテマエでしかなかったはずのものがホンネへと転倒した戦時中）とではギャップがあると考えるところこそ、鈴木は両者を逆接の接続詞でつなげている。そこでは暗に、戦前と戦後はともに問題のないものと前提されており、戦時中はそのからのいわば逸脱、はずれである。断絶をはさんでいまに続いているものは善であり、不連続ではずれた戦時中の不都合ないしは過ちを鈴木は批判している。

二、鈴木の問題点

こういう鈴木の問題は、高良というひとりの女性指導者の歴史的な位置づけとしても、さらには彼女がたしかに参加した戦争の歴史的な位置づけとしても、あまりに「非歴史的」である。「戦時中」と言えば、一九三七年の日中戦争全面化から四五年までを指すのがふつうだが、戦争は突然始まったわけではない。それは、一八九〇年代から日本の国家、資本、民衆の各レベルで展開されていた海外植民事業の必然的な帰結であった。その植民地主義戦争を戦い、支える兵士ならびに非武装民衆男女の能動性と共同性の形成と組織化なしには戦争遂行は不可能であった。そしてひとたび形成され組織化された能動性と共同性は、戦争状態が終了したのちも消えることなく、いまこの社会を構成する者の社会性にならざるを得ない（引き継がれているはずだ（たとえば、「われわれ日本人」という自己認識、「日本人」でない者についての認識など）。だからこそ、戦時非武装民衆の能動性と共同性の中味と、その形成過程を明らかにすることが必要なのであり、そのために、指導的立場にあった者の翼賛が問題となってくるのである。そのなかで女性指導者の戦争翼賛を論じる意味は、植民地主義戦争という国家事業のために、「二流国民」である戦後の女性の能

動性と共同性がどうつくりだされたか、という課題と深く関わっている。日本が始めた植民地主義戦争という重要点を忘れて、現代のわれわれが、単に「戦争」や「非常時」と抽象化して語るなら、日本の女たちが出した戦争協力や翼賛の意味を見誤る。

高良の戦時中の過ち、という批判は、鈴木の意図に反して、「戦争の狂気」といった俗流歴史観と同様、戦争の責任を不問に付すことになってしまふ。戦争がそれまでも、それ以後ともつながりのない逸脱した異常事態であるなら、逸脱は今後もいきなり起こるかもしれない、「悪いのは戦争」であり、結局、だれにも責任はないということなのだから。

高良について論ずべきは、なによりもまず、戦前の生活合理化運動と平和主義から、戦時中の翼賛を経て、戦後の平和運動へという、断絶や転向ならぬ、連続である。高良はいつも、日本の女性をとりまく不合理で退嬰的な束縛状況を変革しようという、強いフェミニスト的動機から行動していた。問題は、変革をとというフェミニスト的動機の中味である。戦前の高良は、タゴールを紹介し、児童心理を論じ、キリスト者の平和運動組織「日本友和会」を設立し、女性参政権運動に参加し、とさまざまな活動をしている。しかし高良が指導者として本領を発揮したのは、三〇年代からの「新興生活運動」においてであり、そこで生活の近代化、科学化、合理化を女性によびかけた活動が、国民精神総動員中央連盟の委員へと彼女をおしあげたのであった。高良は、日本のイエ制度の事大主義を強く批判し、科学的、合理的な家庭づくりを説いた。有閑と豪奢を嫌い、質実で合理的な生活様式への改善を提言し、また女性も対等の権利を獲得して社会に尽くすべきだと主張した。その基盤には、女性は科学的知性をもってそうした家庭生活、社会生活をよく担いうるのだという、いわば「進取の精神」あふれる女性観があった。そして高良自身がそういう女性の見本となって、各方面で指導力を発揮した。この女性観は、日中戦争全面化以降に高良が行な

った、贅沢廃止の主張、合理的な婦人翼賛組織の設立をという訴え、戦時国家体制の合理化といった要求と、まったく矛盾しない。いやただ矛盾しないというのではなく、女性の力と可能性を確信する高良の近代的女性観こそは、彼女を積極的な翼賛者にしたのである。転向が行なわれたわけではないので、本人には反省のしようがない。

もつとも、八三年の自伝で戦時中をふりかえる高良の発言に、意識的なごまかしがあることもまちがいない。彼女の自伝には、戦時中の自分の被害を強調することで、指導者として行なった発言の責任を減じようとする姿勢がはっきりとある。高良は、日米開戦には腹を立てたと言いい、みずからの生活の窮乏と、思想的な要注意人物として憲兵の取り調べを受けた一件に焦点をあてた回想を記している一方で、戦争協力の活動については、四〇年の大政翼賛会参加に言及してほんの二頁半の自己弁護を述べているだけである。⁽⁵⁾ たしかに高良は、一九四四年に、徴兵拒否をしたクリスチャン青年、石賀修に影響を与えた日本友和会関連の人物として、憲兵の取り調べを受けている。しかしこの一件は、戦争末期の、対象を拡大して行なわれていた治安弾圧の自家中毒ぶりを物語るもので、戦時中の高良の被害を証しはしない。また、大政翼賛会中央協力会議参加については、全国規模で女性の組織化を進めるための婦人局設置を提言した功績をみずから強調するかと思えば、同会議で非戦を主張できなかったことをふりかえって反省するという、矛盾に満ちた自己弁護を行なっている。実は戦時国家のほうは、女性を総力戦体制の中核をなす担い手として組織することに、高良の期待するほど熱心ではなかったから、彼女は大政翼賛会参加当初の熱をじきに失い、協力会議にも出席しなくなる。そのことがのちに、なにも心底から全面的に大政翼賛会に協力したわけではないのだという、自己弁護の余地を高良に与えることになったのは、皮肉である。

しかし自己弁護に見られる矛盾やごまかし以上に重要なのが、自己弁護を根底で支えている高良の確信、

つまり戦前、戦中、戦後と時代を経るなかで頓挫することのなかった彼女のフェミニズムであり、それを頓挫させなかった状況の、いまに至るまでの連続である。

そういう視点に立つなら、鈴木がすくいあげる高良の平和運動とはなんであったかも、問わなければならない。自伝のタイトルを『非戦を生きる』とした高良が生きた「非戦」とは、どんなものだったか。戦前の高良が友和会を中心に行なった平和運動は、敵同士を和解させる絶対平和の理想を掲げた理念的なもので、進行しつつあった日本の海外植民地拡大の現実のなかで葛藤した様子はない。それどころか「大東亜婦人の覚醒」をめざした高良の大アジア平和主義と大アジア・フェミニズムは、戦中の翼賛への助走となった。自伝巻末に置かれた柘植恭子による「解説」は、戦前から戦中への高良の連続をよくとらえているが、鈴木は柘植の所論をほとんど採用していない。ただし柘植も、戦後の高良が参議院議員として、また市民として、「アジアを中心とした平和運動に後半生をかけ」たことには「言葉にならぬ償いの思いを感じる」と言って、曖昧な表現ながら、そこに戦中とは連続しない高良を見ている⁽⁸⁾。しかし言明されない「償いの思い」なるものが高良にあったとして、それを支えたのは、戦後改めて正しさを認められた、あいもかわらぬ彼女の「大アジア平和主義、大アジア・フェミニズムではなかったか。翼賛と解放の境界は見分けがたいものである。

三、解放と翼賛の連続

戦時中の翼賛を過ちとして、高良の戦争責任を論じる鈴木の議論のしかたは、ほかの女性指導者についての議論にもほぼ共通している。ただし市川房枝論は少々例外で、鈴木は市川が一貫して女性の政治参加、社会参加の実現をめざして活動をつづけたという連続性に注目し、その問題点を指摘している。つまり鈴

木によれば、市川の「女権主義」こそが翼賛の土台にあり、女性の参加を言いつづけた市川には、なにへの参加かという問いが欠けていた。ところが、市川の連続性に関する鈴木に関心は徹底したのではなく、結局、市川の翼賛はナショナリズムへの「転回」、天皇制ナショナリズムへの「回心」といった、連続性を否定する言葉で説明されている。⁽⁹⁾そしてその市川の名をあげて次のように、女性指導者たちの翼賛を、彼女たちの善なる「願い」とは逆のもの、つながらないものとして批判している。

「戦争の被害を少しでも少なくしたい、という市川房枝の言葉をまつまでもなく、婦人運動家の戦争加担・協力の出发点には、そのような願いがあったことをわたくしは否定するものではない。だが、その願いと逆には、彼女らが次々と戦争体制にコミットし、それを最後まで支えてしまったのもまた事実であった。この彼女らの足跡・軌跡を、いま、わたくしたちはどう考えるべきか。

わたくしたちは、状況とのきびしい対決を避けた、主観的善意や意図の空しさを知ることができるのではなからうか。⁽¹⁰⁾」

女性指導者の戦争協力を論じるときに問題とすべきは、女性の地位向上や封建的状況の変革をという望みと、戦時動員体制への協力、つまり解放と翼賛が、矛盾をきたさなかつたことである。いや、矛盾をきたさないどころか、翼賛の理由は解放を望む展望のなかにあつた。たとえば、女性の社会貢献を實現したと考えていた高良は、国家による戦時女性動員に大きな期待をもつた。しかも、結局は「女の場は家庭」という考えを手放さなかつた国家よりも、徹底した動員体制づくりを望んだほどであつた。翼賛だけがナショナリズムではない。高良の大アジア・フェミニズムも、市川の女権主義も、その実行主体としての「日本の女性」というナショナルな前提を自明なものとしていた。論ずべきは、「主観的善意や意図」（そこには、現在であれば「フェミニズム」と呼ばれるものも含まれる）の「空しさ」ではなく、そうした善

き意図が、空しいどころか、どれほどに効力を発揮したかである。そしてもちろん、その結果つくりだされた女たちの「国民」としての能動性と共同性が、現在のわれわれのありようをどこまでどう規定しているかである。

〔註〕

- (1) 鈴木裕子『フェミニズムと戦争―婦人運動家の戦争協力』マルジュ社、一九八六年、五二―五三頁。
- (2) 同書、四八頁。
- (3) 同書、七四頁。
- (4) 高良とみ『非戦を生きる―高良とみ自伝』ドメス出版、一九八三年、一〇四―一〇四頁。
- (5) 同書、一〇二―一〇四頁。
- (6) 同書、六七頁。
- (7) 同書、二〇一―二二五頁。
- (8) 同書、二二四頁。
- (9) 鈴木裕子『フェミニズムと戦争』一〇三、一一六頁。『女性史を拓く1 母と女 平塚らいてうと市川房枝を軸に』未来社、一九八九年、一九二―一九三頁。『女性史を拓く2 翼賛と抵抗 今、女の社会参加の方向を問う』未来社、一九八九年、四九、五一、七五―七七頁。
- (10) 鈴木裕子『フェミニズムと戦争』一九三頁。